



尼崎市立武庫中学校

学校だより 平成25年5月号

校訓 友愛 正義 自主 創造 健康

思いやりをもって生きる

校長 大石 泰樹

今月の話は思いやりをもって生きようということです。ある本に出ていたバスの運転手さんの話を例にしてお話しします。

ある日のバスの中でのことですが、混みあう車内で母親に抱かれた赤ちゃんが火のついたように泣いていました。次のバス停についたとき、そのお母さんが、運転手さんの横に行き、お金を払おうとした時のことです。

運転手さんは「目的地はここでもいいんですか？」と聞きました。泣き叫ぶ赤ちゃんを抱き抱えた母親は「新宿まで行きたいんですが子どもが泣き、乗客の皆さんにご迷惑をおかけしますのでここで降ります。」といったのです。

その話を聞いたとたん、バスの運転手さんは、車内のマイクで、「皆さん、この若いお母さんは新宿まで行くのですが、赤ちゃんが泣いて、皆さんにご迷惑がかかるので、ここで降りると言っています。子どもは小さい時は泣きます。どうぞ、皆さん、少しの時間赤ちゃんとお母さんを一緒に乗せて行ってください。」と、お願いしたのです。

ほんの数秒たって一人の拍手につられて多くの乗客が拍手をしました。お母さんは何度も何度も頭を下げてお礼を言っていたそうです。

私は、この話からいろいろなことを感じました。「なんと心遣いのできる思いやりのある運転手さんなんでしょう！」そう思いました。そして、運転手さんはマイクを通して乗客に訴えかけています。このことから、「言葉かけの大切さ」を感じました。

思いやりは、行動や言葉かけで表さないとわかりません。この運転手さんの言葉かけによってバスに乗っていたみんなを温かい気持ちにし、乗客の皆さんの拍手を引き出したのだろうと考えられます。この運転手さんは本当にすばらしいですね。そして、次にすばらしいのは乗客の皆さんです。運転手さんの呼びかけに拍手で応えたという心と行動のすばらしさです。

中学校生活を過ごす上で、運転手さんや乗客の皆さんの「思いやり」に満ちた「心」や「言葉かけ」や「行動」を忘れないで生活してほしいと願っています。(小学校中学校例話集参照)

特集 武庫中学校の被災地支援について

武庫中学校は、東日本大震災が発生した直後から、生徒会を中心とした被災地中学校との交流、継続的な募金活動(平成24年度に入ってから、『継続的な支援と被災地を忘れない!』との言葉をスローガンにして『募金 day is 11th』を設定し、毎月11日に阪急武庫之荘駅と校内で募金活動を開始した。)講演会などの様々な取り組みを行ってきました。生徒たちは、テレビやインターネットを通して震災について理解はしていますが、実際のところは、表面上の情報として得ているにとどまっています。さらには、東日本大震災に関する報道が減少するにつれて、生徒たちは、震災を遠い過去のことのように感じ始めています。

被災地の現状を知るためには、一人でも多くの者が現地に赴き、自分の目でその実情を見ることが必要であり、被災地で生活する方々と交流し、ボランティア活動に参加することで、テレビやインターネット等を見るだけでは決して得られない被災地の方々への深い理解が得られ、その苦難を実感することができると思います。

被災地の現状を実際に見聞した生徒たちは、尼崎に戻ってから『発信源』の役割を担い、尼崎の学校や地域から『震災を風化させない』ことに貢献し、尼崎からの継続的な支援活動につなげていける力を発揮してくれるものと期待できます。



このような考えの下、今回、平成25年3月28日(木)から3月30日(土)までの2泊3日、有志生徒・教員が被災地・気仙沼の地を訪ね、教育委員会、仮設住宅を訪問し、そこで生活されている方々との意見交換や気仙沼市立鹿折中学校を訪問し、生徒会役員・野球部員と交流を深め互いに応援メッセージの作成をしてきました。復興の現状についても鹿折中学校の校長先生らに案内してもらいました。(左の写真は第1

8共徳丸の前にての説明の様子)今回の経験を生かし支援活動に取り組むことで、東日本大震災への理解をさらに深め、学校・地域及び後世にその教訓を伝えていきたいと考えています。